「修士論文完成に向けての取組について」

社会福祉学専攻　本間　良（令和２年度修了）

通信制大学院を修了した今、思うことは、この機関紙『With』に寄稿された先輩の方々からのメッセージは、重要なポイントが集約され、論文を作成するうえで大変有益であったということです。私からも皆さんに向けたメッセージとして少しでも役立つと思うことを２点お伝えします。

１．論文作成に力を入れることのできる環境づくり

論文作成の原点は何か。言い換えると、なぜ自分は大学院の門を叩いたか常に問われます。大学院で何を研究したいのかが明確であれば、自ずと意欲・集中力を持続させる力になるはずです。論文作成は孤独な作業です。しかし、院生同士のチームとしての力を生かすことが、「やる気」の維持にとても役に立ちます。私は「よし、やるぞ」と気持ちを切り替える時には、他の院生にLINEを通じて宣言することで、集中することができました。この繰り返しが自分だけでなく、他の院生の「やる気」の向上にもつながり、お互いにプラス効果が生まれます。各々の研究テーマは異なっていても、取組むための気持ちの準備は共通しています。

また、限られた時間を有効に活用するためには通信制のメリット、デメリットを十分に理解しておくことが必要です。仕事と両立しながら研究を進める者にとって、時間に融通が利くという点で通信制のメリットはありますが、これは両刃の剣です。この落とし穴には十分に気を付けなければなりません。私は修了に必要な課題レポートの作成・試験を１年次で終え、２年次の論文作成の時間を確保しました。これは、この機関紙『With』に寄稿された先輩からのメッセージにより、論文を仕上げるためにはタイムマネジメントは必須であると意識したことで、行動につなげることができたのだと思います。

２.論文作成過程におけるポイント

入学当初の研究計画書を実際に調査研究が可能なレベルまで到達するプロセスにおいて、多くの先行研究などの資料を収集することになります。重要な点は、先行研究を読み込んだ後の処理です。こうした資料を効率よく活用するためには、常に整理しておくことです。私が行った整理方法は、カテゴリー別にチューブファイルに綴じ、資料ごとにインデックスを

使用し、必要な時にすぐに読み返すことができるようにしました。単純なことなのですが、整理を怠ると、見たい時にその記述箇所を探すのに手間取ってしまいます。これでは、非効率ですし、無駄な労力を使うことでモチベーションが低下してしまいます。また、先行研究を読む視点として、「何が分かって、何が明らかにされていないか」を意識し、整理しておくとよいでしょう。引用文献として活用する際にとても役立ちました。

　次に、スクーリング、面接・通信指導、構想・中間レジュメについてですが、それぞれのステップにおいての取組は、研究を進めるうえでの課題が明確になり、その課題に取組むことで研究の焦点が絞られていきます。通信制大学院ガイドブックの「論文合格までの進め方」を繰り返し読み、ご自身の研究の進捗をこの流れに合わせる意識をしっかりもつことが、時期を逃さない取組につながります。論文作成の取り掛かりは１年次から始まっています。私は１年次のスクーリングにおいて担当教員に研究テーマに即した分析方法を質問したことで、調査から分析方法に至るまで、具体的にイメージできる構想の目途が立ちました。しかし、その後の「学位請求論文研究計画書」の作成を経て、２年次に入ったところで予期しない出来事（新型コロナウィルス）により、対応を迫られることになり、研究倫理審査申請書の作成においては、調査対象の変更や、調査方法の選択肢を増やすなど状況に合わせた対応が求められました。今後の状況は刻々と変化することを想定し、イレギュラーなことへの対応が求められた際、時期を逃さず取組むことを念頭におかなければなりません。

　最後になりますが、実際の私の経験から言えることですが、論文を作成するうえで逆風と思える状況は、新たな視点の発見や後押しになることもあります。厳しい環境下においての制約が続きますが、この通信制大学院で学ぶ貴重な機会に、皆さまにとって納得のいく論文に仕上がることを願っています。そして、この学びが皆さまの今後に有益に展開されることを期待いたします。